

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13308

研究課題名（和文）映像による知の拡張を目的とする、映像記録を活用した通時的比較研究

研究課題名（英文）Chronological comparative study for Expanding knowledge with visual archives

研究代表者

鈴木 岳海（SUZUKI, TAKAMI）

立命館大学・映像学部・教授

研究者番号：20454506

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：1. 京都市静原の成人儀礼を記録した『烏帽子の子たち』（大森康宏、1985年）と、その30年後を記録した『the Sons of the Sons of Eboshi』（鈴木岳海、2018年）の映像比較により、通時的比較研究を可能とする伝統行事の映像記録において、同じことの繰り返しはもとより、「変わらないもの」「変わるもの」について、儀式だけではなく生活へも目を向けて記録していく必要があることが確認できた。

2. 市民との協同性をもとにした時系列変化を示す映像記録の枠組づくりと映像提示モデルの構築を目的とした写真展を開催し、「撮る」「撮られる」「見る」を固定化しない映像プラットフォームを実践した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会を長い周期で動的なものとして捉え、社会構造と社会的機能の変化や社会変化における人間の知覚や認識の変化、さらに調査者の知覚と認識の変化などを分析するには、同一現場・同一対象・同一撮影者を軸とする映像記録が不可欠であることが認められた。また記録映像が共感を呼び起こすことから、学術研究において、歴史と個人の体験の相互関係を自ら探索することを促す感覚への領野を拡大する可能性を示した。

今後は、新生活様式を想定したオンラインとより活用しやすい映像アーカイブを通じたフィードバックを含む調査情報の共有や調査の成果をともに社会へ発信する映像プラットフォームの活用が必要となることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：1. By visual comparison between “the Sons of Eboshi” (Yasuhiro Omori, 1985) and “the Sons of the Sons of Eboshi” (Takami Suzuki, 2018) that are films about traditional coming-of-age Eboshi-Gi rites in Shizuhara, a village in Japan's Kyoto province, it is necessary to record rituals and daily life in Chronological comparative study about traditional events.

2. Photo exhibition “We also want to shoot from the Newal daily life” that do not fix three position, “filming” “be filmed” “watching” works well as a Chronological comparative study through the visual platform in collaboration with citizens.

研究分野：映像人類学

キーワード：映像人類学 同一現場・同一対象・同一撮影者 学術映像 通時的比較研究 映像アーカイブ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、デジタル記録と保存技術の発展による動画の記録・保存・共有が世界中でなされるようになってきている。これらの映像は、物語映像や芸術的映像、事件・事故のニュース映像をはじめ、人類学における現地の調査記録である民族誌映像にまでおよんでいる。

一方で、人文科学が想定してきた社会や国家といった枠組みが自明ではないと認識されるようになり、西欧近代を基礎とした人文科学の存続さえも危ぶまれている。こうしたなかでミシェル・フーコーが伝統的な人文科学を補完し刷新するであろうと人類学の意義を説き（フーコー1974）、エヴァンス・プリチャードが、人類学と歴史記述をその源とする歴史学との連携を唱え、社会変化の中での人間存在の理解へ促してきた（Evans-Pritchard, 1981）。こうしたなかで、人類学では共時的な映像記録が多数制作され、また共時的な人類学と通時的な歴史学とをつなぐ映像アーカイブを活用した保存・共有の実践を見られるようになった。

しかし、対象を歴史的に俯瞰する通時的視座を持つ映像記録のほとんどは、同じ調査現場と同じ対象を同じ撮影者が記録するものではなく、体系化された試みとはなっていない。ジャン・ルーシュによるドゴン族のシギ儀礼を対象とした240年にも及ぶ映像記録は構想段階であり、彼の弟子である大森康宏によるフランスの移動民を対象とした事例に限られている。

近年の人類学分野で見られる映像作品は、調査地の今を捉えていながらも、制作者の主張や制作思想を強調するドキュメンタリー映像に近づいている。これらの重要性は一定認められるが、記録映像が人類学または人文科学の研究に資する歴史的資料として構築することは、将来の科学のために怠ることはできない。とくに映像記録の技術的発達と人類学と歴史学の連環の重要性が語られ、人類学の自省的な展開があったことから、過去と現在の同一現場、同一対象を同一撮影者が体系的に記録し、通時的に比較研究する意義がこれまで以上に高まっているといえる。

2. 研究の目的

1990年代以降、映像技術の発展により動画映像（以下、映像）が大量に記録・保存・流通されているが、その可能性は今を記録する現在性に留まるものではない。本研究の目的は、過去の事象の視覚的復元を可能とする映像記録による、同一現場と同一対象を同一撮影者によって記録する通時的な比較研究が、人文科学において新たな仮説や理論を秘め、知の拡張を促すことを明らかにし、国内外の通時的映像記録の取り組みを再検討し（先行映像の検討）、その先行映像の検討に基づき、通時的比較研究を可能とする体系化された歴史的資料としての映像作品を制作し（映像モデルの構築）、国内外の研究者との研究会を開き、本研究で制作される映像モデルが人文科学の基礎科学であることを検証するものである（映像モデルと知の拡張の検証）。

3. 研究の方法

(1) 時系列比較を可能とする国内外の映像作品の調査と制作する際の課題抽出

(2) 京都市左京区静原の成人儀礼を記録した『烏帽子の子たち』（大森康宏、1979年撮影、1985年制作、81分）を対象として、30年後の同じ通過儀礼に対する参与観察とインタビュー調査モノ、現象、行為的の30年を経た変化に関する参与観察とインタビュー

とくに儀礼のプロセスを参与観察し、儀礼に関わる記憶や体験についてのインタビューをおこなうことで物的・社会的・心的環境の変化について記録する。

対象にとっての映像記録の意味付けに関する調査と映像記録化

過去の映像を映像で記録された対象に視聴するなかで記録していた時や、その後の人生の中で、映像記録がどのような意味を持っていたのかを映像記録化する。同時に、30年後に映像として記録されることの意味付けについて、映像記録を相対化するための映像記録をおこなう。

対象と映像記録による通時的な変化の共有と探索、共感の喚起の映像記録化とモデル化

映像に記録されたモノや現象、行為の具体的な変化について映像を見ながら、対象と調査者がともにその変化について問いを立てる。また現在では見られなくなったモノや現象、行為と、出会うことができない人と映像を通じた共感を記録する映像モデルを開発する。

調査者と対象の関係の変遷の映像記録化

眼差しの主体と客体の関係が固定化できないことから、映像記録された内容の変化についての記録だけでなく、30年に及ぶ調査者と被調査対象との関係の変化について映像記録化する。

(3) 30年の時間経過の中で、(2)に記載した調査内容を統括する通時的に比較可能な映像作品を制作し、モデル化をおこなう。

(4) 通時的比較分析による映像作品の評価

調査者に映像作品をフィードバックすることで、長期に渡る社会の動きの中で、通過儀礼の機能と対象にとって意味づけの変化を明らかにすることで、過去の儀礼に対する見方を更新する。

(5) 人文科学における、通時的比較映像のモデルと、映像による知の拡張可能性に関する検討

人類学、歴史学、哲学、文学等人文科学の基盤を専門とする国内外の研究者を招聘し、製作された記録映像を研究会で上映し、制作された映像モデルが人文科学の知を拡張し、人文科学の新たな基盤となることを検証する。

上記の(2)から(4)のプロセスは、部分的であっても、可能な限り循環的に調査を進め、(5)の段階で調査プロセスと導き出された課題について検討できるようにする。

4. 研究成果

(1) 通時的映像の比較研究

通時的映像の比較研究を通して現在と過去の相違点、共通点を調査し、この時系列比較の重要性を明確にし、同時に今後の民族誌映像の制作の指針を確立することを目的とした本研究において、以下の成果があった。

通時的比較研究を可能とする体系化された歴史的資料としての映像モデルの構築

共同研究者である大森康宏が1979年に京都市左京区静原の成人儀礼を記録した『烏帽子の子たち』(1985年)をもとに、研究代表者である鈴木岳海がその30年後を記録した『the Sons of the Sons of Eboshi』を制作した。

とくに儀礼のプロセスを参与観察し、儀礼に関わるモノと行為の変化について記録し、その具体的な変化について検証できる映像とした。この比較により、日本の伝統文化のダイナミックな変革があったことがわかる。とくに映像を見ることによって、日本の伝統行事のシステムの大きさと、その変遷の速さについて、視聴可能となっている。

また2007年から2019年にいたる静原の春季祭礼を記録しており、その10年余りのあいだの祭り組織について見るができる。祭りを管理する組織は、静原の住民がこれまでの慣例にならって持ち回りで組織化され、限られた人的資源の中で大きな変動はない。祭りを直接運営する組織においても、とくに神輿を運行する若者が運行可能人数をやや上回る程度で参加しており、これについても大きく変化していない。一方で、祭りに使われるモノとして、神輿を乗せる車両が導入された。このような事象を通じて、成人儀礼のみではなく、儀礼を成立させている村落共同体について見てみると、共同体を維持する世代間の思いは薄れ、考えが乖離し、30年間に儀礼に関わる行為が簡素化されていくことが、儀式に反映されており、現実が鮮明に記録されている。簡素化はやがて儀式だけでなく社会全体の簡略化であり、村の人事、経済、さらに社会システムの悪しき合理化をも進めているようだ。これは日本文化の縮小化であるが、若い人が新しい文化を求める傾向を示しているとも言える。

これらのことから、過去の映像で記録された場所で、過去に記録された対象や現象(人々、文書や日記などの文書資料、日用品、儀礼や儀式で使用する品々、家屋などの物資、ものを制作する行為や儀礼行為など)がどのように変化したのか、同じ撮影者が映像記録することによって明らかにする必要があるといえる。具体的には、場所や人、モノの変化を主として、伝統行事の記録にあたっては、同じことの繰り返しはもとより、「変わらないもの」「変わるもの」について、儀式だけではなく生活へも目を向けて記録していく必要があることが確認できた。

一方で、過去の記録映像を通して、歴史と現在に生きる個人の体験が交差し、かつての知覚や認識、おこなった行為がその人物の生活様式、人間関係などの生き方全体に与えた影響を浮かび上がらせることについては課題が残った。具体的には、過去の映像と新たに記録した映像を対象へフィードバックすることで、人生の中で、映像記録がどのような意味を持っていたのか、または持っているのか、歴史と個人の生き方の変容の関係を映像によって具体的に浮かび上がらせることを想定していた。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大防止措置により、実際にフィードバックすることができず、被撮影者の意見や考えなどを作品に盛り込むことができなかった。社会を長い周期で動的なものとして捉え、社会構造と社会的機能の変化や社会変化における人間の知覚や認識の変化、さらに調査者の知覚と認識の変化などを分析するには、今後の新生活様式を想定したオンラインとより活用しやすい映像アーカイブを通じたフィードバックと情報共有のあり方についても、検討が必要になることが明らかとなった。

通時的比較研究を可能とする体系化された歴史的資料としての映像共有提示モデルの構築

2018年度と2019年度において、研究代表者である鈴木岳海は、撮影者だけではなく市民などとの協同性をもとにした時系列変化を示す映像記録の枠組づくり、ならびに映像提示モデル構築を実践した。具体的には、「撮る」「撮られる」「見る」を固定化しない実践として、これまで「撮られる側」にあったネワール族のひとつとが、自らの生活に目を向け写真で記録する取り組みを支援し、写真展「わたしたちも撮りたい!~ネワールのひとつとがみる生活文化~」を開催した。これにより、共有の人類学において、映像をプラットフォームとした研究調査を実践することができた。

こうした取り組みによって、国内外を架橋する調査プロジェクトに参加したアクターが、映像に記録されたモノや現象、行為の具体的な変化と、記録映像をもとに現出した個人の記憶や知覚と認識を通して、個人の生き方や人間関係の変化と社会状況の変化とのつながりと、直接的、間接的に変容したプロセスを具体的に辿ることができた。また現在ではすでに使わなくなったモノや、実践されることのない現象や行為、亡くなって会うことができない人々と、記録映像を通じて出会うことで、心的インパクトやそれゆえにもたらされるモノや現象、行為、人物への関心や共感が呼び起こされ、記録映像による歴史と個人の体験の相互関係を自ら探索し共感するような記録映像のモデルともなっている。

このような映像を軸とした調査情報の共有や調査の成果をともに社会へ発信する映像プラットフォームを活用した研究調査手法は、今後の映像記録を活用した通時的比較研究にとどまらず、映像によるグローバルな関係性を有する市民を含めた記憶や知覚、共感といった領野まで人文科学における知を拡張させる可能性を有するものといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鄭 思芸, 鈴木 岳海, 望月 茂徳	4. 巻 1
2. 論文標題 踏み台昇降運動に着目した高齢者用リハビリテーションゲームの開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 エンタテインメントコンピューティングシンポジウム2018論文集	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木岳海	4. 巻 26-2
2. 論文標題 記憶のうまれるとき、語りがつむがれるところ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館大学国際平和ミュージアムだより	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木岳海	4. 巻 17号
2. 論文標題 映像学部学修ポートフォリオの作成と活用について - プロトタイピングの視点から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館高等教育研究	6. 最初と最後の頁 47-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 11件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大森康宏
2. 発表標題 映像人類学者のしごと・民族誌映画の世界
3. 学会等名 公開シンポジウム「フランスのジブシー<旅する人びと>の記憶と人類学」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大森康宏
2. 発表標題 人と環境に働きかける映像の制作と循環
3. 学会等名 シンポジウム「暮らしは環境を映す」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木岳海・キムセツピョル
2. 発表標題 暮らしは環境を映す
3. 学会等名 シンポジウム「暮らしは環境を映す」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuhiro Omori
2. 発表標題 Changements de rythme dans les formes sociales: rite de passage a l'age adulte au Japon, hier et aujourd'hui
3. 学会等名 SOCIETE DES ETUDES EURO-ASIATIQUES, Musee du quai Branly (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大森康宏
2. 発表標題 京都の鉾差しの現在
3. 学会等名 『祇園祭創始1150年記念』事業 講演と上映「京都の祭り行事 山鉾と剣鉾」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木岳海、大森笹音、越田祐貴、玉山優衣
2. 発表標題 映像でつづる京都・久多 - 地域の魅力を伝える短編映像の上映と解説
3. 学会等名 アスニー京都学講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大森康宏
2. 発表標題 ジョゲット・ブンブン
3. 学会等名 2019東京ドキュメンタリー映画祭「特集映像人類学の冒険」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大森康宏
2. 発表標題 土と火と水の葬送-バリ島の葬式-
3. 学会等名 2019東京ドキュメンタリー映画祭「特集映像人類学の冒険」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木岳海、アムリット・ヴァジュラチャリヤ、HDCC
2. 発表標題 写真展「わたしたちも撮りたい!ネワールのひとびとがみる生活文化」
3. 学会等名 立命館大学BKCメディアライブラリー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大森康宏
2. 発表標題 東北地方のイタコに関する生活変化と通時的視覚変化の実態について
3. 学会等名 東北地方のイタコに関する映像を用いた被撮影者との討論会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木岳海、アムリット・ヴァジュラチャリヤ、HDCC
2. 発表標題 写真展「わたしたちも撮りたい!ネワールのひとびとがみる生活文化」
3. 学会等名 立命館大学OICライブラリー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木岳海、アムリット・ヴァジュラチャリヤ、HDCC
2. 発表標題 写真展「わたしたちも撮りたい!ネワールのひとびとがみる生活文化」
3. 学会等名 立命館大学国際平和ミュージアムミニ企画展示
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木岳海、アムリット・ヴァジュラチャリヤ
2. 発表標題 写真展・ワークショップ開催「ネパール大震災、その時がおこったのか 映像で記録することの諸問題について」
3. 学会等名 立命館大学映像学部
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アムリット・バジュラチャリヤ、鈴木岳海	4. 発行年 2018年
2. 出版社 立命館大学映像学部	5. 総ページ数 50
3. 書名 写真集 カトマンズ盆地のいまむかし-ネパール大地震から2年半-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

鈴木岳海、監修「第三代將軍徳川家光による後水尾天皇への饗応を再現」映像記録作品、スポーツ・文化・ワールドフォーラム京都実行委員会、6分、2016年 鈴木岳海、監修「映像記録：『鷹山調査・山立て記録』」祇園祭山鉦連合会、2017年

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大森 康宏 (Omori Yasuhiro) (00111089)	国立民族学博物館・その他部局等・名誉教授 (64401)	